日本国内においてロシア諜報機関が獲得した情報提供者の特徴

○ 大 上 渉

(福岡大学人文学部)

キーワード：諜報, コレスポンデンス分析, 行動パターン

Attributes of agents recruited by russian intelligence agencies in Japan

Wataru OUE

(Faculty of Humanities, Fukuoka Univ.)

Key Words: espionage, correspondence analysis, behavioral pattern

目 的

諜報 (インテリジェンス) 活動とは, 他国の機密情報を秘匿された手段により入手しようとする政府の活動であり, これまでその多くについては公に語られることはなかった。しかしながら, 近年では諜報活動の在り方は「機密から政策へ」(Lowenthal, 2009) と言われており, 例え諜報活動であっても政府の政策に寄与し, 従属せねばならないとの認識が広まりつつある。こうした背景により, 諜報活動に関する学術的研究も盛んになりつつある。心理学の領域においても, 諜報活動をテーマにした研究, 例えば, 米国防総省並びに陸・海・空軍の情報コミュニティにおいて心理学者が果たす役割 (Shumate & Borum, 2006) や, なぜ他国の諜報機関に情報を提供してしまうのか, その動機づけに関する研究 (Michalak, 2011), また諜報活動に対するプロファイリング実践の試み (Bloom, 2013) などが発表されており, 新たな研究課題として注目されつつある。

各国の諜報活動には, その対象や手法に独自の特徴が反映されやすいと考えられる。なぜならばそれぞれの諜報機関には独自の設置目的があり, 目的に応じた任務, 職員の採用・教育訓練, 諜報技術の発展・継承などがシステマティックに行われ, 組織のスタイルが現れやすいと予測されるからである。組織固有の行動パターンについては, 大上 (2013) が国内テロ事件を対象に, 国内各過激派にはそれぞれ固有の犯行パターンがみられることを明らかにしている。そこで本研究では日本国内においてこれまで検挙されたロシア (旧ソ連) による諜報活動の特徴について, 多重対応分析を用いて明らかにする。

方 法

1. 分析対象事件の収集と分析変数 本研究では, 終戦後からこれまでの間に, 日本国内においてロシア (旧ソ連) 諜報機関に協力し, 検挙された情報提供者 26 名を分析対象とした。ロシア以外にも北朝鮮及び中国による諜報事件発生しているが, 本研究では分析対象に含めなかった。その理由としては, 北朝鮮による諜報事件については, そのほとんどが情報収集活動ではなく秘密工作活動, すなわち韓国工作に従事する要員の獲得・育成と潜入支援, 並びに工作資金源の調達であること, また中国による諜報事件については, これまでの検挙件数が数件程度と極めて少なく, その実態が明らかではないことが挙げられる。

事件情報の収集には, 主にオンライン新聞記事データベース (読売新聞社「ヨミダス文書館」や朝日新聞社「聞蔵2」など) を利用した。収集した各事件から, 情報提供者に関する次の 12 変数, すなわち協力した諜報機関(2), 情報提供者の年齢(4), 身分(6), 勤務先(6), ロシア語の習得(2), 無線操作技術の有無(2), 情報提供

者になった経緯(4), 動機(4), スパイ技術訓練の有無(2), 情報入手方法(3), 入手情報の内容(6), 稼働期間(3)を抽出した (括弧内の数字は変数内のカテゴリ数を示す)。

2. 分析方法 分析には, 統計ソフト「IBM SPSS Statistics 20」を用いた。分析手法は, まず日本国内で活動するロシアの2つの諜報機関, 軍参謀本部情報総局 (GRU) と, 国家保安委員会 (KGB; 現在は対外情報庁・SVR) がそれぞれ獲得した情報提供者の属性・行動に違いがみられるか否かを明らかにするために, GRU 及び KGB ごとに情報提供者の各変数の度数を求め, フィッシャーの直接確率検定を行った。次に GRU と KGB 両組織が獲得した情報提供者の類似性あるいは相違性を調べるために, 上記 12 変数に基づいて多重対応分析を行った。

結果と考察

フィッシャーの直接確率検定の結果, 対象者の身分, 勤務先, ロシア語の習得及び入手情報の内容に GRU と KGB で有意な偏り (それぞれ $p < 0.01$) がみられた。次に多重対応分析を行ったところ, 下の布置図が得られ, 2つの次元, すなわち獲得時における強制・圧力の程度を示す次元 (第1次元) と, 提供情報の機密性の高さを示す次元 (第2次元) が見出された。以上の結果から, 両諜報機関が獲得した情報提供者の特徴が明らかになった。例えば, GRU は防衛省本省や自衛隊各部隊に勤務する自衛官を獲得し, 主に防衛情報や軍事技術情報を入手する傾向がみられた。一方, KGB は主としてロシア語が堪能な外務省職員を獲得し, スパイ技能を学習させる傾向がみられた。また入手した情報は外交や科学技術に関連する事柄が多かった。今回得られた知見は, 公安・外事警察による対諜報活動に少なからず寄与するものと思われる。